

グローバリゼーションと日本独自の哲学研究の意義
—大森荘蔵の事例から—

お茶の水女子大学 院生 石田恵理

グローバリゼーションは、今日、社会における空間的・時間的輪郭の変化の問題として受けとめることができる¹。この変化は、人間の活動における時間的構造の劇的な変化に直面したことで生じた領土や領域の持つ意味の変化に起因すると理解することができる。なぜなら、地理的な隔たりは、典型的に時間によって計られると捉えられていることが指摘できるからである²。

グローバリゼーションという言葉が今日のようにありふれたものとなる以前より、19 世紀から 20 世紀にかけての哲学や文学、社会学における著述においては、人間の距離や空間についての経験が、鉄道や航空機といった高速輸送手段の出現によって変化し、地理的・政治的境界線を超えた相互交流の可能性が高まる可能性については指摘がなされてきた³。一方で、研究の世界に目を向ければ、この空間と時間の変化は、その国独自の研究の意義といったものに疑いを投げかけると言うことができる。なぜなら、通信手段の発達に即した相互交流の促進によって、諸外国で発表された研究成果の取り入ればかりか発信もますます容易になり、あえて一つの国「独自」の研究をしているということの意義は危ぶまれるようになっていいると考えられるからである。

本報告においては、日本における西洋哲学研究の歴史において、国内では未だ研究の進められていなかった思想家を紹介することを通し、その文献学的研究とは異なる哲学上の問題についての独自の研究境地を切り拓いた思想家として大森荘蔵を取り上げる。なぜなら、例えば、初期の大森哲学におけるウィトゲンシュタインの影響はまぎれもないと指摘されているが、「ことだま論」以後の大森哲学は、その影響をとどめてはいない独自の考察を展開していると捉えることが可能とされるから⁴である。

「ことだま論」においては、一つの発言が、それがなされる様々な状況において持つそれぞれの意味の背後に、同一不変の意味の存在を描く立場が否定されている。大森自身は、一つの発言に対して、それが「無限に変化する状況の中で、これまた無限に変化する働きをしようとするとき、どのような発声動作をすればよいかを習得していること」⁵が一つの言語を習得しているということだとみなし、このことを「無限に異なる紐で蝶結びをつくる手動動作を習得すること」⁶になぞらえている。このような大森の考察は、日本語に限定されない言語に対する深い理解から導かれていると言える。また、一方で、この考察は、「ことだま」と呼ばれる、自らが今話している言語の根底にある、事物を直接に喚びおこすことのできる力への直観によっても支えられていたと言うことができる。言葉がこのような力を持つという捉え方は、もちろん日本独自のものとは言えない。だが、われわれの思考過程から言語を切り離すことはできず、そのため、思考と現にそこで用いられる言語とは分離できない関係を持つと言える。このことから、本報告では、グローバリゼーションの進展によって完全に失われるとは言えない一つの国独自の哲学研究の意義について考察を進めていきたい。

¹ William Scheuerman, 'Globalization' in *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, <http://plato.stanford.edu/entries/globalization/> 2014 年、2014 年 11 月 21 日アクセス。

² 同上。

³ 同上。

⁴ 野家啓一「ウィトゲンシュタインと現代日本の哲学」『ウィトゲンシュタイン読本』飯田隆編、法政大学出版局、1995 年、58 頁。

⁵ 大森荘蔵「ことだま論—言葉と『もの-ごと』—」『大森荘蔵全集 第四巻 物と心』岩波書店、1999 年、118 頁。

⁶ 同上。